ぽっかぽか ぞう 12がつ

先月は、遠足で行った消防署見学をきっかけに、積み木コーナーで再現して遊ぶことが盛り上がりました。多摩センターの街を作ろうと、千歳屋に見立てた積み木を積み。駅にあるお店の名前「アイスクリーム屋さんがあるね！」「おにぎり屋さんもあるよ！」など、子ども同士の会話がたくさんありました。
後半からは、子ども会の劇「てぶくろ」を楽しみながら取り組みました。今回は、劇について書かせて頂きます。子どもたちが「表現することの喜び」「友達と一緒にできた達成感」を味わうことができるように支援していけたらと思います。

年少さんの子ども会は「劇遊び」
『絵本の世界を、劇遊びとして再現することで、友達と楽しさを共有する。』ことを目標にしています。
絵本の世界が大好きになり、初めて劇遊びをしたときもいろいろな動物になりたい！と表現する楽しさを感じていました。最初は、恥ずかしかった子もお友達が楽しそうにやっているのを見て、自分から「やりたい」と言ってくれるなど、集団の力を感じました。
「劇」ではなく「劇遊び」のため、お客さんに向けてではなく、自分たちが役になり表現することを楽しむ段階です。子どもたちが表現することを楽しんでいるのを見てもらえたらと思っています。

～絵本には、創った人の想いやメッセージがある～

劇の題材の絵本「てぶくろ」について少し書かせて頂きます。
おじいさんが落とした手袋に、ネズミが住み始め、後からきた動物たちも家に入れてもらいます。手袋にそんな大きな動物たちが入るなんて、無理！と思われますが、絵の表現力で窮屈そうだけど入れている！と感じます。
動物が増えるたびに、窓ができたり、呼び鈴がついたり、ウッドデッキがついたりと、少しずつ家らしく変化していきます。
「わたしも入れて」→「どうぞ」と繰り返しのやり取りが子どもたちは大好きです。
「てぶくろ」は、ウクライナに伝わる民話をラチョフという画家が絵本を描き、1968 年に翻訳されました。日本で発売されてから 50 年以上も愛される絵本「てぶくろ」。
動物たちが民族衣装を着ているのが特徴です。ラチョフが絵本を描いたのが第二次世界大戦の後。そんな時代背景も考えると、絵本からのメッセージや想いを感じてしまいます。
はじめのページの手袋と、動物たちが出ていったあとの手袋の絵をよく見比べると、手袋の位置も、まわりの小枝への雪の積もり具合もまったく同じです。
つまり、時間が経過していない。手袋を落としたことで始まる、動物たちによって繰り広げられるファンタジーの物語です。手袋を落とす、拾うという日常のとなりにあるファンタジーの世界。これは絵本の魅力の一つだと思います。ついつい大人は、子どもたちに「現実」を伝えたくなります。「雲に乗れるかな？」→「あれは水蒸気だよ。」これでは、子どもたちもわくわくしませんよね。
ファンタジーのある作品を経験しながら、子ども達は本格的な物語世界を楽しむための準備をしていくと言われています。「絵本」は必ず作者の意図や想い、メッセージがあります。何を伝えたかったのかな？と考えながら読むと。絵本の時間が楽しくなります。絵本作家：寮美千子先生が「絵本は子どもが読む本ではなく、子どもから読める本」とおっしゃっていました。つまり、大人も楽しめるのが絵本。
ぜひ、親子で絵本を楽しむ時間を大切にして頂けたら幸いです！